

---

# 笑顔

璃瑠@ & 不幸K & 愉快的仲間たち

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

笑顔

### 【Nコード】

N8768J

### 【作者名】

璃瑠@&不幸K&愉快的仲間たち

### 【あらすじ】

笑顔、それは誰もがしたことのある表情ですね、それをした事のない人物の初の笑顔のお話です

## （前書き）

どうも、はじめまして、この度小説を書く事になりましたメイイト  
言います。

まあ今回は二次創作なのでネタが分かる人しかわかりませんが、多  
分短編と言いながら長くなるとおもいますのでそこはあしからず。

それでは皆さんお楽しみください！w

笑顔

皆さんも人生に何度もしたことがあるのではないだろうか？

面白いテレビ番組を観ている時、友達と遊んでいる時、他愛のない世間話をしている時、お茶を入れてくれる先輩の胸を見ている時・  
・いや、最後のは気にしないでくれただの妄言だ！

まあそんなこんなで皆さんもした事があるであろう笑顔、しかしもしかしたらこの世界に何人か、笑った事がない、という人もいるであろう。

しかしもしも、そんな人が笑った瞬間を自分が始めて目撃したら。それは素晴らしい事だとは思わないか？そして俺は今まさにそれを成し遂げた瞬間なのである。

3

誰の笑顔？それはもう誠実な読者諸君はわかっているだろう。

そう、俺は長門の笑顔を目撃したのだ。

その日俺は、いつものようにうるさい我が妹に起こされ、歯を磨き、制服に着替え、胃に食料を入れ込みいつもどおりの朝を迎えていたんだ。

そしていつもと変わらぬ時間に教室に着き荷物を置こうとした矢先・

・・・「おはようキョン!!!」  
そんな声と共に背中を思いつきり叩いて来て挨拶をしてくる奴は俺の知る限りでは一人しかいない、そう、涼宮ハルヒである。

「なあハルヒ、もつと静かな挨拶はできないのか？」正直毎日こんな挨拶をされたら俺の背中についてつかハルヒの手形でも付いてしまうのかと心配になってしまっくらしいの威力なのである。そんな俺などお構いなのかハルヒはいきなり不機嫌な顔をして「なによ、折角あたしが挨拶してあげてるのよ？もつとシャキつとしないさい！」などと反論され言いたい事は大量にあるがこのまま言い争っていても俺の朝の睡眠タイムが無くなってしまうと思えば適当にハルヒに謝り寝ようとするハルヒが「そういえばあんた昨日部屋にノート置いてなかった？時間無かったからまあいいかって置いていつちやっただけ。」そういえば数学を昨日ハルヒに教えて貰っていてノートを使っていたのを思い出しかバンを覗くと案の定数学だけノートが無かったのである。

「あんた大丈夫？今日一時間目数学で宿題当たるの確かあんたでしよう？取りに行ったほうがいいんじゃない？」確かに・・・やれやれ、今日は朝の睡眠タイムはお預けのようだ。「じゃあ取りにいつて来るか」  
「・・・。」するとハルヒが「ついでにあたしのノートも取ってきてよキョン。」おい待て、お前も部屋に忘れたのかよ・・・てか意外とお前ドジなのか？「うるさいわね！いいから早く取ってきてきなさいよ!!!」

平団員は団長の言う事には口出ししないで速やかに実行する!!!」  
・・・何か俺が悪い事をしたみたい

になっっているが決して俺は悪くない、と読者諸君に宣言しておこう。という事で俺は部室のドアの前に着きドアをノックする、まあこれは俺の中の暗黙の了解なのだが朝比奈さんが着替えていたら大変なのでドアに入る際必ずノックをするようにしているのだ「・・・よし。」返事がないのでおれはドアノブに手を置きドアを開けるとそこには以外な人物がいた。

「……………」部室には万能宇宙人、長門の姿があつたのだ。長門は朝結構部室で本を読んでいるのでそんなに驚きはせずとりあえず挨拶をする事にした

「長門、おはよう。」「……………」おはよう。「……………」俺は長門が挨拶したのに驚いていた。

いつもならこちらを向いて俺を視認するとすぐに本に眼を落とすというのに今回は挨拶をしたのでかなり俺は驚いているのだ。

そんな俺を見かねたのか長門は首を傾げていた、俺は我に返りすぐさま用件を済ませようとした。

「な、長門、この部屋にノートが置いてなかったか？ハルヒの分と俺の分があるはずなんだが……………」  
すると長門は自分のバックからノートを二冊取り出し俺に差し出してくれた。

「あなたのノートの21ページ目の7行目に書かれてある式の間違いを確認されていた。」ノートを渡した後に長門がそう言ったのでそのページを確認すると確かに間違いがあつた、……………というかページとか

行数まで覚えているか普通？まあ長門ならありえない話ではないが。  
「ちなみに今は行数は53行目、  
文字は今現在1703文字。」・・・何の事を言ってるんだ？と俺  
は意味がわからなかったがまあそんな  
大事な事ではないと思ひ詮索するのを俺はやめた。

しかし困った・・・俺はその問題が間違いだと分かるのだがどう解  
くのが分からなかった。

さてどうしたものかとノートと俺が勝利がないにらめっこをしてい  
ると長門が自分のカバンから筆箱

を取り出して俺からノートを取りテーブルに置く、何をするのかと  
思ひ見ていると「座って・・・。」

そう言われ俺は言われた場所に座ると隣に長門が座り鉛筆を手に取  
っており俺を見てこう言った。

「私が教える・・・許可を。」・・・何故毎回許可を取るのか謎で  
はあるがこの言葉は俺に取ってみれば

かなり嬉しい自体だ、このまま数学を受けていたら間違ってしまい  
ハルヒに何を言われるか分かった物ではない。

「長門・・・すまん、教えてくれ。」情けなくはあるが背に腹は変  
えられないからな、長門に教わることにした。

「わかった、まずこの問題は・・・あなたの持つ教科書104ペー  
ジの12行目の式を使い、その後教科書105ページの4行目の式  
に代入することで・・・。」長門のコンピュータも顔負けの  
記憶力と

教え方の上手さに助けられ、ものの5分程度で自分でもできるよう  
になったのだ、ハルヒも教え方は上手いがこれは長門もかなりの上  
手さだ思っているとホームルーム5分前のチャイムが鳴り始めた。

「ヤバイな、急がねえとホームルームに間に合わない。すまん！長門今日はありがとうな、お前のおかげで助かったぜ。」すると長門は「別に問題はない。」まったく長門らしい返事だぜ。と思いがながら俺はそうだと思い「長門、今日帰りにすぐ近くの喫茶店にいかないか？ちようど割引券があるんだ。行かないか？今日勉強教えて貰ったお礼という事で。」すると長門は俺が分かるぐらい（普通は見分けがつかないが）の反応を見せて少し間があったが「・・・貴方がそう言うなら。」と承諾してくれたようだ。

そして現在放課後、SOS団の活動は休みになった。多分長門が配慮してくれたのだろう、俺は急いで教科書などをカバンに入れて教室を後にした。

校門で待ち合わせしていたのだが校門には長門がすでに到着していた。

「すまん、待ったか？」俺がそう言つと「・・・私も今来たところ。」とよく有り勝ちの台詞を言われて少々驚いたがその辺は気にしないようにした。

そして、校門から約15分ほど歩いて行くと喫茶店に到着した。そこは俺の親の知り合いの人が働いていて、俺の親がその人から割引券を貰っていたので行く機会はないと思っていたがこれもいい機会と思って誘ったのだ。

とりあえず喫茶店に入ると「おや？これはこれは奇遇ですね、いらつしゃいませ。」

「古泉、何でここに前がいるんだ？」すると古泉は「そのように

言われましても、ここは私のバイト先

なので・・・としか言えないのですが、何かご不満ですか？」この野郎！いつもバイトとか言って神人を

倒しているのかと思っけていりゃあマジなバイトもしていたとは・・・。「では僕からも質問を一つ、なぜ

あなたが長門さんとここに来ているのですか？」すると長門が「彼が私が問題を教えたお礼にと連れてきてくれた。」「なるほど、世間一般で言うデート、ということですね？」「断固として違つと言つて置こう。」「失礼、冗談です。まあそれはとにかくとしてどうぞお席の方へ。」「

古泉の誘導に従い席に着いてメニュー表を見ていて俺は夜ご飯もあるし長門のために来たという事でコーヒを1つ頼んだのだが長門はというと「サンドウィッチ、ナポリタン、それとカレーライスの大盛りと

メロンソーダ2つ。」「・・・財布が心配になってきた。

俺がコーヒを飲んでる間に頼んだものをどんどん平らげていった長門は俺がコーヒを飲み終わる頃にはメロンソーダを2つ目を飲み終わっていた頃だった。

「ど、どうだ長門？満足できたか？」「・・・満足。」「そうか、ならいいんだが・・・」「長門がメニュー表をチラチラ見ているのは気にしないでおこう、すると長門は唐突にこう言ったのさ。

「今日はありがとう。」「

その言葉と共に長門の顔が今までしたことのない表情、そう、笑顔を象っていたのさ。

俺はこの時世界が止まったとも思ったよ。しかしこれは夢でもない

現実なのだ、そしてここにある笑顔は  
普段人間なら普通にする事、しかしそれは普通の笑顔ではない。多  
分これは彼女が生まれてから初めての  
、そしてこれからは当たり前に行うであろう、笑顔なのである。

俺はそれを目に焼き付けておこう、そう思いながら長門の笑顔を見  
続けていた。

(後書き)

え〜と・・・ずいぶん書いてなかったもので感覚が分からなくなっていましたw

まあ楽しんで頂けた方はありがとうございます。  
楽しめなかった方は申し訳ありませんでした。

このようにふつつか物ですが頑張っていますので、感想の方待っていますw

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8768j/>

---

笑顔

2010年10月9日04時49分発行